

お茶の間学 I

生活特報部 FAX 092 (711) 9056 メール seikatsu@nishinippon-np.jp



フリーペーパーの創刊に向けて原稿を執筆する永山佳代さん

こんにちは！ あかちゃん

第3部

私は産めますか？⑥

《いつかは子どもが欲しいと考えながら、あまりに知識がなかったこと、自分の体を大事にしてこなかったことを、この連載を担当して痛感した。私(31)と同じように思っている女性が、多いことも分かった。どうすれば、そんな状況を変えられるのだろうか》

一連の取材で最初にお話を伺った主婦28も、自分の無知を悔いていた。中高時代、雑誌モデルに憧れて過剰なダイエットとリバウンドを繰り返した。何度も生理が止まったが悪いくことは思わず、むしろ

「楽しいや」と考えていた。2年前に不妊治療を始め、順調な生理がいかにか大切かを知った。「正しい知識を持っていれば、こんなにつらい思いをしなくて済んだのかな」。時々、そんなふうに涙を流す。

正しい知識を広めよう

科教授の中塚幹也さん(51)はそう嘆く。昨年、岡山県内の医療系学部に通う大学生429人を対象に調査したところ、妊娠・出産に関する知識の低さが明らかになったからだ。

女性の妊娠率が低下し始める年齢を「40歳以降」と回答した学生は51・7%。生殖補助医療なしで自然に妊娠できる年齢として「45歳以上」を選んだのは30・9%に上った。正解は「35歳を過ぎると妊娠しにくくなり、自然妊娠できるのは45歳くらいまで」。

「間違った認識を持っている人があまりに多い」。岡山大学大学院保健学研究

大きいため配慮が必要で、どのように教えるかは難しい」と説明する。

新たな試みもある。鹿児島県助産師会は、3年前から中高生向けの性教育の

「学校任せにせず、家庭でもきちんと教えることが大切」と訴えるのは、福岡市の不妊治療専門クリニックに勤める助産師、石澤勤子さん(51)。男女の体の違いや避妊の知識、妊娠の適

ランス語でゴウノトリを意味するフリーペーパーが4月、福岡市で創刊される。編集長の永山佳代さん(46)は「これから妊娠、出産を考えている女性たちに正しい知識を伝え、不妊をもっと身近に考えてほしい」と狙いを語る。

創刊のきっかけは、永山さんの周囲に不妊に悩む人がたくさんいたこと、そのほとんどが治療を始めてから「もっと早く知っていたら」と後悔していることだ

「ラ・シゴニー」は隔月で発行し、妊娠の基礎知識や不妊治療体験者の声などを掲載していく。「今、不妊かもしれないと悩んでいる人だけでなく、まったく関心がなかった層にも読んでもらいたい」。6月号からは一般女性が手に取れるよう、オフィスや公共施設

《この連載は「早く産んだ方がいい」というメッセージではない。さまざまな理由や事情で赤ちゃんを望まない、望めない人もいるだろう。ただ「知らなかった」という後悔だけはほしくない。

そして男性も、既に出産を終えた人も、知ってほしいと考えてほしい。出産や不妊は女性の問題、個人の問題だから自分には関係ないでは済まされない。女性の労働力を求める一方で、働きながら産み育てやすい環境をつくらなければならない。背景があるのだから。

社会が変わらなければ、いくら正しい知識があっても「産む」という選択は難しい。家庭で、会社で、地域で、それぞれの立場でできることがきっとあるはず。一緒にその一歩を探していきませんか》

—おわり

◇この連載は新西ましほが担当しました。4月上旬に第4部を掲載予定です。

◇電話相談の日程変更7日付で掲載した不妊体験者を支援するNPO法人fineによる無料電話相談の日程が「13日と23日」から「13日と28日」に変更になりました。

国の学習指導要領では、小中高で妊娠しやすい年齢や不妊治療について教える規定はない。文部科学省学校健康教育課は「個人差が

「ラ・シゴニー」。フ